2

わたしはやよい。もうすぐ小学一年生。

わたしの家族はお父さんとお母さん、四年生のお兄ちゃん

とわたし、そして４０頭の牛たち。

3

三月の暖かい日、ピーチっていうお母さん牛が、メスの子牛を産んだ。

おでこのハート型の模様がとってもかわいい。

お父さんが名前をつけた。

『マーチ』。わたしとおなじ三月生まれっていう意味なんだって。

4

わたしたちが牛乳をもらうために、
子牛はお母さん牛と離ればなれにされちゃうの。
やよい「ねえ、お父さん、わたしマーチの世話がしたい。」
父「うーん、やよいにはまだ少し早いんじゃないかな。」
やよい「ねえ、ねえ、おねがい。誕生日のプレゼントはいらないから、マーチをわたしにちょうだい。」
父「ほんとうに世話できるかな？マーチはやよいのぬいぐるみじゃないんだよ。」
やよい「できる！できる！お兄ちゃんだってやってるもん。」
こうしてわたしはマーチのお母さんになった。

5

まずはミルクやり。

マーチは、ミルクをぐいぐいのみながら、しっぽをぶんぶん。ふっている。

一生懸命ミルクを飲んでいるマーチは最高にかわいい。

兄「や～い、マーチはやよいのぬいぐるみ～。」

あっ、お兄ちゃんがお父さんのくちまねしてる。

言い返そうとしたら、お兄ちゃんはぴゅーっと逃げちゃった。

6

次は汚れた敷きわらのそうじをする。

一輪車にいっぱい積んで運ぼうとするけど、う〜ん重い！

よろよろしながら運んでいたら、あっ、またお兄ちゃんが来た。

今度はそばでわたしがよろよろしているまねをする。本当に腹がたつ。

わたしたちと同じように、マーチだってきれいな部屋で寝たいでしょ？

夏休みももうすぐ終わりの日の夜。

大きな台風が来て、外は風がびゅーびゅーふいて、雨がざーざー降っている。

わたしはマーチが心配で、小屋に様子を見に行った。。

やよい「マーチ、だいじょうぶ？こわくない？」

そうして、小屋の扉を開けたとたん、

8

ぴかっ、といなずまが光って、

どしゃーん！

かみなりの落ちる大きな音がした。

あっ！

かみなりにびっくりしたマーチは、わたしを突き飛ばして、

外へ飛び出して行っちゃった！

9

どうしよう、どうしよう！

マーチは真っ暗な裏山にどんどん入って行っちゃう。

「危ないから、裏山にはぜったい子どもだけで入らないこと。」

っていつもお母さんが言ってるけど、マーチが見えなくなっちゃうよ！

わたしは走って走って必死にマーチを追いかけた。

（半分まで抜く）大きな木の下でマーチはやっと止まってくれた。

やよい「マーチ、だいじょうぶだよ。わたしがついているからね。」

マーチにぎゅっと抱きついたら、心臓がどきどきいっている。

わたしの心臓もどきどきいっている。

父「やよいー！マーチー！」

あっ、誰かが呼んでいる。お父さんの声だ！お兄ちゃんもいる！

お兄ちゃん、パジャマのままで捜しに来てくれたんだ。

11

わたしが二年生、マーチが一歳になったばかりの四月。

やよい「やだやだ。マーチが山の牧場へ行っちゃうなんて。」

母「だいじょうぶ。、マーチはやよいのことを忘れたりしないよ。

それに秋になったら、やよいにすてきなプレゼントを持って帰ってくるんだから。」

やよい「すてきなプレゼント？」

母「マーチは山の牧場でお母さん牛になるの。やよいが三年生になるころには子牛が産まれるのよ。」

やよい「じゃあ、マーチの牛乳が飲めるの？」

母「もちろんよ。やよいはマーチのお母さんだから、子牛が生まれたら、おばあちゃんになるね。」

やよい「やだあ、おばあちゃんなんて。」

兄「あーあ。あんなに泣いてたくせにもう笑ってる。」

お兄ちゃんがまたからかうけど全然平気。

マーチの子牛と牛乳なんて。今から胸がどきどきするからね。

その次の日曜日、牛たちが山の牧場へ行く日が来た。
やよい「マーチ、おいしい草をいっぱい食べて元気でね。
友達とも仲良くね。
わたしも学校がんばるからね。」
マーチがこっちを向いてにこっと笑った気がしたよ。
　わたしとマーチのお話はこれでおしまい。
みんな、牛乳を飲むときには、わたしたちのことを思い出してね。

おしまい

表紙

やよいとマーチ

脚本・絵　ありのようこ

1

（やよいの声で）　みんなは牛乳好きですか？

今日は牛乳好きって人も、そうじゃない人も

わたしたちのお話を聴いてください。